
魔法戦記リリカルなのは～鍵を持つ者

wingzero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは 鍵を持つ者

【Nコード】

N5180Y

【作者名】

wingzero

【あらすじ】

鍵を持つ少年は自分に課せられていた使命を全うするために世界を渡り歩いてきた。使命が終わり自分の世界に戻る少年。その世界とは「魔法少女リリカルなのは」のせかいである！今、どんな扉も開くことができる鍵を持つ者の物語が始まる！！

プロローグ（前書き）

鍵を持つ使命を終えた少年と魔法によって大切な人たちに出逢った
幸せな少女達の物語。

ブローグ

ブローグ

くくくく

???「これで・・・終わりだああああ!!!!」

「ギアアアアアア!!!!」

荒んだ大地、1人の少年が「この世の天災」と呼ばれていた伝説の悪魔を無傷で討伐していた。

???「これでこの世界は安全だな・・・」

少年は悪魔の胸を貫いた自分の武器を抜きだす。その武器は、鍵のような形をした剣である。

???「これで、俺の役目は終わった・・・やっと帰れる・・・海鳴に・・・」

少年は自分に課せられていた役目が終わり無邪気な笑顔で帰れる事を喜んだ。

???「みんな元気かな?なんだかんだで4年間も連絡無しだったからな・・・うん・・・怒られないよな・・・怒られそう・・・(グス)」

少し涙ぐみながらも少年は自分のいるべき世界、故郷、地球へと帰るのであった。

「なのは side」

なのは「フェイトちゃん！はやてちゃん！」

私は今日、私立聖祥大付属中学校に入学します。新しい制服を着て学校に向っていると中学校の正門に金髪の少女、フェイト・T・ハラウンと茶髪の少女、八神はやての2人が立っていた。

フェイト「なのは～おはよう」

はやて「なのはちゃんおはよう、なんやなのはちゃん早かったな～てつきり一番最後に来ると思ってたんやけどなあ」

なのは「ちょ、はやてちゃん～いくら私が朝が弱いからって今日はちゃんと起きれたよ～（プク～）」

フェイト「てことは明日からは遅刻するってことかな？なのは」

なのは「ひどい！ひどいよフェイトちゃん～（シクシク）」

3人で話していると2人の少女がなのは達に近づいてきた。

アリサ「おはようなのは、フェイト、はやて。いい天気になったわね」

すずか「おはようなのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん」

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん、おはよう。これで皆集まったね」

はやて「ほなクラスを確認してから体育館に行こか」

すずか「みんなと同じクラスになれたらいいね」

フェイト「うん・・・バラバラはいや」

皆でクラス表を見に行くと、見事に5人全員同じクラスになって全員喜んだ。

5人の美少女と同じクラスになった男子生徒たちは涙を流しながらたいそ喜んだようだ。

アリサ「あらなのは、今日はそのネックレスしてきたのね」

なのは「うん！今日からはずっとこのネックレスを着けるって決まっていたの！」

すずか「ふふふ、久しぶりにネックレスが三つ揃ったね（ニコ）」

はやて「それってたしか小学校のときの大事な人からもらった物や

ったつけ？」

なのは「うん！そうだよ！」

フェイト「いいな、それ可愛くて。私も欲しかったな」

なのは、アリサ、すずかの3人が着けているネックレスは同じ星型をしている。

はやて「な、な、な、3人とも。また彼の話聞かせて、なあ」

フェイト「わたしも聞きたい！」

アリサ「ええ良いわよ。わたしがあいつにテストで勝てなかった事とか何もかも話してあげるわ！」

すずか「ふふふ、アリサちゃん一回も勝てた事なかったもんね」

なのは「にやはは」。元気かな、隼人君」

アリサ「あいつのことだからそのうち帰ってくるわよ！それにしても一回も連絡がないって良い根性しているわねあいつは」

すずか「仕方ないよアリサちゃん。皆隼人君の連絡先とか知らなかったんだから」

フェイト「ふふ、そのうち会えるといいね」

はやて「ほんまにな。もし会えたら絶対紹介してや」

フェイト、はやて、アリサ、すずかの4人は隼人と呼ばれている男の子の話で盛り上がっている。

なのはは1人隼人と呼ばれているとても大事な人のことを思い出していた。

なのは「（わたしは今でも元気にやってるよ。ちょっと前まで怪我して歩けるかどうかって言われけどリハビリも終わっていつも通りの生活に戻れているよ。あ！後ね、私実は魔法使いになったんだ。昔見せてくれたような魔法じゃないけど隼人君と同じ魔法使いなんだよ！もう使命っていうやつは終わったのかな？終わったのなら早く帰ってきてまた皆で学校に行ったり遊んだりしたいな。それに・
・・／／／（ボン）」

アリサ「ちょ、ちょっとなのは！？なに赤くなってるのよ！」

なのは「え！？あ、いや、その・・・な、なんでもないよ／／／／
／」

なのは達は他愛ない話をしたり隼人に関する過去話をしながら入学式へと向う。

新暦68年4月、桜舞う季節、なのは達は後に大きな事件を解決す

る。

鍵を持つ者と共に・・・

ブログ（後書き）

ども

wingzeroです！

最近なのはシリーズの世界の虜になった作者ですwww

皆さんお分かりと思いますが、鍵とは・・・
まあ後々キャラ紹介のときにでも教えますね（笑）
では

これからも執筆して投稿しようと思いますので
温かい目で見守ってください！
よろしく願います！！

第1話：出会いは異世界で

「アースラ side」

リンディ「ズズズズ……はあ。やっぱり緑茶に砂糖とミルクは最高ね」

クロノ「母さ、いや艦長！ブリッジで和やかに休憩しないでください！！」

エイミィ「クロノ君無駄だよ。今の艦長に何を言っても動じないよ」

説明しましょう。なぜリンディ・ハラウンがブリッジで、あの絶対に飲まない！！けど、一回だけ挑戦してみようかな？（笑）と思ってしまう、胸焼けしそうなほど甘い緑茶を飲んでいるのかというのだ。

この艦、つまりアースラが老朽化と損傷の蓄積が進んでいたため廃艦処分にする可能性がある和本局から告げられ現実逃避……。もとい、名残惜しんでいるのだ。

「……失礼します！」

クロノ「お、来たか。シグナム、ヴィータ」

ヴィータ「おうクロノ、来たぞ」

シグナム「こらヴィータ！ちゃんとクロノ艦長代理と呼べ！勤務中だぞ！」

エイミー「まあまあシグナム。そんなに怒らなくても大丈夫よ」

クロノ「エイミー、それ僕の言う台詞なんだが・・・」

シグナム「そうか、すまないエイミー。ちゃんとヴィータにも言うておくからな」

クロノ「シグナムも僕のこと流さないでよ！！」

シグナム「ふふ、冗談だクロノ艦長代理。それでリンディ艦長は大丈夫なのか？」

クロノ「・・・まだ現実逃避をしているよ」

エイミー「と言いつつもクロノ君も内心は悲しんでいるけどね」

クロノ「ちょ！？エイミー！！いいかげんにしないと・・・」

怒るぞと言おうとした時

<ALERT>ALERT>ALERT>

赤いランプの発行とともに警報が鳴り響きだした。

リンディ「どうしたのエイミー！」

ブリッジ内「「「「艦長!?」」」」」

リンディ艦長が現実に戻ってきた。

エイミィ「か、艦長!？」

クロノ「エイミィ!今は艦長よりこの警報の位置を」

エイミィ「は、はい!・・・判明しました!場所は管理外世界「イーバチュル」で多数の小次元震が起きています!」

クロノ「イーバチュルって言うと確か少数民族が暮らしている文明もない世界だったはずだ。なぜそんな所で次元震が?」

リンディ「考えている暇はないわ!今すぐイーバチュルに行くわよ!」

ブリッジ内「「「「了解!」」」」」

「管理外世界「イーバチュル」」

イーバチュルに転移したアースラはモニターで起きていることに全員驚いている。

エイミィ「な、なに・・・あれ・・・」

クロノ「あの黒い虫みたいな生き物は一体・・・」

モニターに移っているのは全身真っ黒で黄色い眼をしている虫みたいな生き物が町にたくさんいた。

男性「うわあああああ、くるな！くるな！！」

モニターのひとつに1人だけ民族衣装を着た男性がいた。

しかし、黒い虫に生き物に全方位囲まれた。すると、男性がいたところから一匹の黒い生き物が現れた。

クロノ「な！？今の一体！？」

シグナム「リンディ艦長！今すぐ出撃の許可を！！」

リンディ「わかりました。シグナムさんとヴィーターちゃん、それにクロノの3人を先頭にあの黒い生き物の討伐及び民間人の捜索・救助をお願いします！！」

ブリッジ内「『了解！！！！』」

（クロノside）

僕たちはイーバチュルに降り黒い生き物の討伐と民間者の搜索をしている。

クロノ「デュランダル！スナイプショット！！」

デュラ「All right！」

スナイプショットで黒い生き物を攻撃する。攻撃があたりと生き物は倒れると消滅した。どうやら攻撃は効いているみたいだ。

クロノ「ん？なんだあれは！？」

生き物が消滅するとハートの形をしたものが現れた。
ハートの形をしたものはそのまま空に上がっていきしまいに見えなくなってしまった。

それを見ているとシグナムがやってきた。

シグナム「クロノ代理！大丈夫か！！」

クロノ「シグナム！僕は大丈夫だ！それよりあの生き物・・・」

シグナム「クロノ代理も見ただか・・・あいつらを倒すと消滅しハートの形をしたものが現れ空へと消えていってしまった」

クロノ「ああ僕も確認した。一体やつらは・・・」

ヴィータ「クロノ！シグナム！」

シグナムとしゃべっているとヴィータが飛んでやってきた。

シグナム「ヴィータ！要救助者はいたか！！」

ヴィータ「いいや全然。アイゼンに探索魔法で調べたけど生存者どころか人一人いねえぜ」

シグナム「なんだと！？ならばもう民間人はすでに・・・」

クロノ「ならばここにいる生き物達を全て倒せばわかるな。エイミイ！！！」

クロノが通信でエイミイを呼ぶとモニターが現れた。

エイミイ「（はいはい。分析完了しました。どうやらヴィータちゃんと言った通りでもう民間人はいないわ。その代わり、あの黒い虫みたいな生き物の情報を送ったわ。確認して！）」

クロノ・シグナム・ヴィータはそれぞれのデバイスに送られてきた情報を見た。

ヴィータ「ん？おいエイミー！識別反応しか情報がきてねえぞ！！」

エイミー「（それが、いくら分析しても情報が全てUNKNOWNしかでてこないの。今やっと識別反応分析ができたばからの。」

シグナム「ふむ。未知の生物ということか」

クロノ「とりあえず、生き物を全滅させる！いくぞ！！」

その後、クロノ・シグナム・ヴィータを筆頭に武装職員達と黒い生き物の全滅に成功した。

クロノ「はあ、はあ・・・みんな大丈夫か？」

ヴィータ「ああ、大丈夫だ」

シグナム「私も大丈夫・・・」

その時、大規模な地震が起きた。

エイミー「（！？強大な魔力反応察知！威力は・・・AAAA！？繰り返しますAAA級の魔力反応察知！クロノ君たちのそばに反応！！）

エイミーが叫ぶと地面が大きな黒い池のようになりそこから全身黒

色の巨人が2体現れた。巨人の胸にハート型の空洞がある。

ヴィータ「な、ななな、なんじゃありゃー!!」

シグナム「で、でかいな・・・」

クロノ「ん？ヴィータ！シグナム！あの2体、さっきの生き物に似ていないか？」

シグナム「言われてみると確かに」

ヴィータ「てことはあいつらも倒せばいいんだな？いくぜアイゼン!!」

アイゼン「Ja!!」

ヴィータがアイゼンで1体を消滅しようとする。しかし

ガキン!!!!

ヴィータ「な!?!こいつ固いぞ!!」

攻撃が阻まれるともう1体の巨人が腕を大きく振りかぶって殴ろうとしていた。

シグナム「！！ヴィータ！避ける！！！」

ヴィータ「！！！」

間一髪避けたヴィータ。しかしガードした巨人の次の行動で全員驚愕する。

クロノ「な！？やつらの足元からさっきの生き物が現れたぞ！！！」

シ・ヴィ「なに！！！！！！！」

さっき全滅した生き物達が次々と現れてきている。

クロノ「くっ！！僕とシグナムとヴィータあの巨人2体を相手する！他の皆はあの生き物の討伐してくれ！！！」

局員「！！！！！！了解しました！！！！！！！！！！」

シグナム「さて、私達だけでやつらを倒せるかな？」

ヴィータ「へ！なんだシグナム。怖氣ついたのか？」

シグナム「ふ。冗談。むしろワクワクしてきたぞ」

クロノ「ま、これだけ落ち着いていたら大丈夫だな。それじゃ・・・」

エイミィ「（ま、まってみんな！また魔力反応察知！）」

シグナム「なんだと！？」

エイミィ「（次は空で反応あり！魔力反応・・・そ、測定不可能！？みんな気をつけて！！！！）」

クロノ達は魔力反応がでた空を見上げた。

巨人2体も察知したのか空を見上げている。

すると、空に大きな鍵穴が現れた。

ヴィータ「鍵穴？」

シグナム「おそらく、転移魔法陣なのだろう。しかし・・・」

クロノ「あんな魔法見たことがない・・・」

鍵穴を見ていると黒いコートでフードを被った人間が鍵穴から出てきた。その人が出てくると鍵穴が消えた。

鍵穴から出てきた人物はそのまま巨人の方に向っていった・・・って

クロノ「あ、危ない！！」

僕はデュランダルを構え魔法を発動させようとするが・・・

「???」眠れ・・・」

フードを被った人が巨人を1体簡単に倒し消滅させた。

ク・シ・ヴィ「「「な!!!!????」」」

僕たちが驚いているとその人が僕たちの近くに着地した。

その人は全身の黒いコートで着地したときにフードが脱げた。
かなり黒に近い茶髪で腰まである。

全身のコートを着ているので体型がわかるが、痩せ型みたいだ。
その人は右手に鍵の形をした物を持っている。おそらくその人のデ
バイスだろう。

「???」うん?すみません、怪我はありませんか?」

僕たちは固まっているとその人が話しかけてきた。
少し幼く見える。おそらくフェイト達の年齢と同じぐらいだ。

クロノ「あ、大丈夫。僕は時空管理局・執務官のクロノ・ハラオウ
ンです。怪我はないです。すみませんがあなたは?」

「??? 俺は隼人。金建隼人です」
かなだてはやと

第1話：出会いは異世界で（後書き）

すみません！！

更新が遅くなりました！

ちよつとなのはについて勉強しました。

誤字脱字や変な文章があるかもしれませんが、
ご指南していただけたら嬉しいです。

また次話を楽しみにしていってください！

第2話：使命は終わった・・・はずだよね？（前書き）

隼人がクロノ達に会う少し前から始まります

第2話：使命は終わった・・・はずだよね？

（回想）

クロノ達に会う少し前、彼こと金建隼人は世界と世界を繋ぐ特殊な道を進んでいた。

隼人「さっきのでやっ和使命が終わったから、後は地球に帰って・・・それから・・・をして・・・」

俺は自分に課せられていた使命がようやく終わったので故郷である地球に帰っている最中である。

隼人「それにしてもあんなハートレスがいたなんて驚いたな。あいつらはもういないのにまだ悪意ある闇は健在かあ・・・ん？」

そんなことを考えていると向こうの世界からハートレスの気配を感じた。

隼人「よし！ついでだ！あいつらも倒してから帰ろう！！」

そして俺はハートレスの気配を察知した世界に進路を変えて向った。

「イーバチュル付近」

俺はハートレスの気配を感じた世界、調べたところイーバチュルという世界に近づいてきた。

隼人「確か、少数民族と自然の世界だったよね・・・そんな世界でどうして・・・！！！！ハートレスの気配がかなり強くなった！！！！これはまずい！！！！」

この気配はかなり危険だと察知し、さっきとは比べ物にならないぐらいの速さでイーバチュルに向った。

そしてイーバチュルに到着し、フードを被ったまま扉の前からハートレスの所を見た。

そして俺は、後悔した。

まず見えたのは情報と違い、自然はなく大地は枯れ、空は暗雲が漂っていた。

そして少数民族が居たであろう場所にはハートレスとそれよりはるかに強いあいつらが2体もいた。

隼人「な！？ここまで酷いのか！これはまずい！すぐに行かなきゃ

「!!」

僕はそう思いキープレードを構えた。

するとキープレードの先に魔力が溜まる。溜まると同時に前方に鍵穴が現れる。

すぐさま鍵穴に溜まった魔力を送る。

すると「ガチャ!」と開く音が聞こえた。これで俺専用の道でのこの世界の扉が開いたことになる。

僕はすぐさまイーバチュルに入った。

入って2体のハートレスを見る。するとハートレスはこちらの方を見ている。

隼人「どうやら俺の存在を察知したみたいだ。・・・それは好都合だ!!」

そして僕は1対のハートレスにキープレードを構えて向って行った。

隼人「眠れ・・・」

そうつぶやき1体のハートレスを倒す。

ハートレスは急所を大ダメージをくらったので一発で消滅した。

大地に立ちもう1体を倒そうと後ろに気配を感じた。

後ろを振り返ると男性と女性と女の子がいた。

隼人「うん？すみません、怪我はありませんか？」

僕から声をかけると固まっていた男性が気づき真剣な顔に戻る。

???「あ、大丈夫。僕は時空管理局・執務官のクロノ・ハラオウ
ンです。怪我はないです。すみませんがあなたは？」

と自己紹介をしてきた。

隼人「俺は隼人。金建隼人です」

〈回想終了〉

隼人「それではクロノさん！ここは俺に任せて非難してください！

」

クロノ「な、何を言っているんだ君は！？」

隼人「大丈夫です！それにあいっら、ハートレスやダークサイドは
これまでにたくさん倒してきましたので！」

僕は言うと同時にダークサイドに向う。

だがハートレスの数が多すぎるためなかなかダークサイドの所にま
で行けない。

???「レヴァンティン!!」

???「Ja!!」

するとポニーテールの女騎士が剣でハートレスを倒してくれた。

隼人「だれか知らないけど感謝します!行くぞおおおおおおお
おお!!」

俺は残りのダークサイドに向って跳躍した。

クロノ「お、おい!そんな一直線で突っ込んだら・・・」

隼人「サンダガ!」

俺はまず、サンダガでダークサイドにダメージを与えた。

「???」「な!!!!????」

「???」詠唱も魔法陣も無しでいきなり魔法を使いやがった・・・

「???」それに、あの技・・・AAランクの威力があつたぞ・・・

クロノ「あのデバイスは一体・・・」

後ろでクロノさん達が何か言ってるが、まずはこいつを倒さないと・・・

隼人「闇に帰れ、闇の住人よ・・・」

俺はダークサイドにそう言うときーブレードを構えて突撃する。

隼人「一閃！」

きーブレードでダークサイドの胸を一閃する。

するとダークサイドは体を少し折り後方に飛んだまま消滅した。

隼人「ふう〜終わった〜。何とかハートレスを全滅する事ができた」

俺はそう言いながらキーブレードを消す。

すると、先程の男性のクロノさんがやってきた。

クロノ「ありがとう。金建さん。おかげで助かりました。」

隼人「いえいえ、どういたしまして。あ、それと俺のことは隼人って呼んで下さい。敬語もいらないですよ」

クロノ「そうか？それじゃあ隼人って呼ばせてもらうよ。隼人、君と先程の敵について色々と聞きたいことがある。だから同行してもらえないか？」

隼人「ええ、良いですよ。俺もあなた達に聞きたいことがありますので」

第2話：使命は終わった・・・はずだよね？（後書き）

遅れました

ごめんなさい！！

第3話：挨拶

「隼人 side」

「アースラーの1室」

俺はクロノ達にアースラに連れられた。

クロノ「え〜と隼人、すまないが君のデバイスを預らせてくれないか？別に君を疑っているわけでないが・・・」

隼人「あ〜〜クロノさん」

クロノ「どうした？」

隼人「・・・デバイスってなに？」

その時、クロノと桃色髪の女性と赤毛の女の子3人の顔が唖然としていた。

桃色髪「ちょ、ちょっと！え〜〜と、隼人だったな」

隼人「ええそうです。ところであなたは？」

桃色髪「これは失礼。私はヴォルケンリッターのリーダーを任され

ている烈火の将、剣の騎士のシグナムと申す」

赤毛「私も自己紹介。同じくヴォルケンリッターの紅の鉄騎、鉄槌の騎士のヴィータだ」

隼人「あ、これはどうもご丁寧に。金建隼人です」

シグナム「それで、隼人。デバイスを知らないのか？」

隼人「ええ。全く。これっぽっちも」

ヴィータ「じゃあ、あの鍵の形した変な武器は何なんだ？」

隼人「ああ、これですか？」

俺は右手を前に出す。

3人ともいきなり手を出して何してるのだ？と変な目で見てくる。

すると俺も右手にキープレードが現れる。

ヴィータ「おお！？な、なんだ！？いきなりでできたぞ！？」

シグナム「変わった武器をしているな」

クロノ「これはデバイスではないのか？」

隼人「これはキープレードだよ」

ク・ヴィ「キープレード???」

シグナム「いったい何なのだそれは？」

隼人「え〜と、どう言えばいいんだろう・・・」

???「私も聞いていいかしら？」

キープレードについてどう説明すればいいのか考えていると、1人の女性が入ってきた。

???「初めまして。私は時空管理局のリンディ・ハラウンです」

隼人「あ、初めまして。俺は金建隼人です」

リンディ「よろしくね隼人君。それで、君にいくつか聞きたい事があるんだけどいいかな？」

隼人「なんででしょう？」

リンディ「まずは、そのキープレードについて教えてもらえるかしら」

隼人「いいですよ。キープレードとは、選ばれた勇者だけが使用する事ができると言われている伝説の武器です」

ヴィータ「お前、勇者なのか!？」

隼人「うんうん。勇者とかそんな凄い人間じゃないよ」

シグナム「では何故キーブレードを使えられるのだ？」

隼人「あまり詳しくないんだけど、今わかっているのは『資格』がある者のみ使用できるとしか」

クロノ「その資格というのは？」

隼人「知らない」

ズコオオ

何故かずっこける4人。

クロノ「し、知らないって。なんでだい!!」

隼人「さあ………何でも、産まれてすぐにキーブレードを持つことができてたらしいから」

リンディ「あらあら、すごいね隼人君は」

隼人「いや……褒められても……」

シグナム「（褒めてるのか？）」

リンディ「それじゃあ次の質問ね。そのキーブレードがデバイスではないならどうしてあなたは魔法を使えるの？」

隼人「え？」

クロノ「僕達の魔法とは異なる魔法なんだ君の魔法は」

そうなのか？

俺は普通に魔法を使っただけなんだけど

隼人「魔法を使えるかどうかですよね・・・努力？」

シグナム「なぜ疑問形になるのだ!!」

隼人「冗談ですよ冗談www。実は昔からなんです魔法を使えるの」

俺は両手を前に出し、手の内を上に向ける。

隼人「俺の魔法をこれです。・・・右に炎を・・・左に氷を・・・」

詠唱すると、直径10cmの火の玉と氷の塊が発現する。

隼人「このように、己の魔力と大気中にある魔力を使用して魔法を使えるのです」

シグナム「なるほど・・・私たちのとは全く異なる魔法だな」

隼人「そうなのですか？」

クロノ「僕達のは君のような幻想な魔法ではなく、超科学とされているんだ」

隼人「……はい？魔法が科学で科学が魔法？」

リンディ「そう。つまり、隼人君みたいにいきなり火の魔法を使えたりもできるけどそれは資質を持っている人だけ。他はいわゆるノーマルな魔法しか使えないの」

隼人「ほえ……。なんか頭がグチャグチャになりそうです」

いきなり魔法についての見解をされて意味が分からなくなった。

リンディ「ふふふ。まあこの話はゆつくししていきましょう」

隼人「そうしてくれると助かります」

クロノ「それで隼人。君はどうやってこの世界に来たのだ？」

隼人「普通にこの世界の扉をキープレードで開けて入りました」

ヴィータ「……お前何言ってたんだ？」

隼人「世界の入り方についてですけど？」

クロノ「……なるほど、それも君の魔法か」

頭を抱えるクロノさんとため息をつくシグナムさん。

はて〜、変なこと言ったのかな？

リンディ「そ、それじゃあ隼人君はどの世界の出身なの？」

ク・シ・ヴィ「」（母さん（艦長）ナイス）」

隼人「出身は地球の海鳴市です」

リンディ「……え？」

クロノ「すまない、もう一度言うてくれないか」

隼人「……地球の海鳴市です」

リ・ク・シ・ヴィ「……ええええええええ
ええ！！！？？？」

アースラに4人の叫び声が轟いた。

耳が、
耳が
~~~~~。  
~~~~~。

第3話：挨拶（後書き）

遅くなりました〜

感想などお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5180y/>

魔法戦記リリカルなのは～鍵を持つ者

2012年1月13日21時52分発行